

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年9月1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科

職 名・学 年 博士後期課程2年

氏 名 水 野 佳 緒 里

助 成 の 種 類	平成27年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	52nd Annual Conference of Animal Behavior (ABS 2015) 動物行動学会・第52回大会		
発 表 題 目	Asian elephants acquire inaccessible food by blowing		
開 催 場 所	アメリカ, アンカレッジ市, アンカレッジ大学		
渡 航 期 間	平成27年6月8日 ~ 平成27年6月17日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	300,000 円	
	使用した助成金額	300,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空運賃(諸税・燃油代,発券手数料込)	187,000円
		学会大会参加登録料	61,640円
宿泊費の一部		51,360円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 博士課程の学生において国際学会に参加・発表して経験を積むことは、学位取得の必須条件としても挙げられるように、必要不可欠である。しかし、そのための渡航費や参加費などの資金を自身で賄うことは困難である。貴財団の助成はそのような学生たちにとって、非常にありがたい。		

成果の概要／水野佳緒里

2015年6月10~14日にアメリカのアラスカ州アンカレッジで開催された動物行動学会・第52回大会(The 52nd Annual Conference of the Animal Behavior Society; ABS 2015)に参加し、口頭発表を行った。本大会は動物行動学分野でトップジャーナルの「Animal Behaviour」を出版している Animal Behavioral Society が主催する学会であった。当学会は動物行動に関わる全ての学術的分野の発展を目的としており、対象とする動物は無脊椎から脊椎動物と幅広い。大会の参加者はアメリカ人が圧倒的に多かったが、ブラジルやオーストラリア、アジア地域から参加している研究者もいた。発表数は口頭発表 321 件、ポスター発表 154 件であり、企画シンポジウム以外の口頭発表は 13 セッション(Cognition & learning, Communication, Ecological effects など)に分かれていた。

申請者は、本大会の基調講演者のうちの一人であり、社会的学習に関する研究のパイオニアである Bennet Galef 博士の発表を楽しみにしていた。発表内容は、これまで博士が行ってきた膨大な量の社会的学習に関する研究の一部を順番に紹介していくというもので、改めて彼の研究のアイデアの素晴らしさに魅了された。10年ほど前から注目されている社会ネットワークについてのシンポジウムも面白かった。中でも興味深かったのは 100 匹上のアオシタトカゲに位置情報を記録する小型の GPS データロガーを装着して研究を行っているチームの発表である。ポスター発表では、あらゆる哺乳動物における社会システムと寄生虫の関係性を、20以上の研究結果を統合・比較することで調べた研究が最も面白かった。他にも数々の興味深い発表があった。申請者はこれまで動物の認知に関する研究を行ってきたが、本大会で多様なジャンルの研究発表を聴くことで自身の研究に対する視野が広がった。

申請者は“Asian elephants acquire inaccessible food by blowing”という題で口頭発表を行った。アジアゾウが、届かない位置にある食べ物を鼻から息を吹きかけて取得する行動について発表した。この行動は、これまで注目されていなかったゾウ独特の問題解決手段である。本研究により、餌が遠くにある時のみにゾウが息を吹きかけていたこと、つまりこの行動が「餌を近づける」という文脈のもとで発揮されていたことが解明された。さらに、対象とした 2 頭間で息の吹きかけ方が異なっていたことも明らかとなった。2 頭中 1 頭は鼻息を餌の後ろ側に当てること意識して息を吹きかけているようであった。申請者は元々 Cognition & learning というセッションで発表する予定であったが、他の発表者の都合により、急遽それと並行して行われていたセッション「Ecological effects」で発表することになった。それにも関わらず、30名を超える方々が聞きに来てくださった。質疑応答の際には 5 つの質問を受けたがその中でも、ゾウは重いリンゴまでも鼻息で転がすことができるのかというゾウの鼻息の強さに純粋に関心を抱くような質問が新鮮であった。この質問を受け、今後基礎データとして、ゾウの鼻息の強さ（最大でどの程度の重さ・大きさの物体を転がせられるのかなど）や肺活量の測定を試みても良いのではないかと思った。そのほかには、息の吹きかけ行動を社会的学習により集団へ伝播していくと思うか、野生でもこの行動をやると思うか、という申請者も以前から気になっていた内容に関する質問もあった。発表終了後も、6 名の方が “Your research is cool”, “Your talk was good” などと声をかけてくれた。10 回以上も通し練習をしたにも関わらず、本番では原稿からは目を話すことができなかったことや、話し始めは委縮して声が小さくなってしまい

注意を受けたことなど反省点はあったが、上記のように多くの研究者から質問を得られ、議論もできた。

アジアゾウやアフリカゾウに関する研究の発表は他に7件（口頭発表3件、ポスター発表4件）あった。申請者を含めて全475件中8件も発表があるということは、他の分類群の動物よりも相対的に多く、ゾウが研究対象として注目されている証拠だと感じた。発表者の一人であった Lynette A. Hart 博士と、その夫である Benjamin L. Hart 博士とお話しできたことが嬉しかった。Hart 夫妻は、ゾウの道具使用や、脳の構造に関する論文を執筆してきた研究者である。Hart 氏は現在の研究の話や、野生のゾウを見に行った時の話をしてくださり、また私が現在取り組んでいる研究内容についても話を聞いてくださった。学会後にメールのやりとりもすることができた。また、データロガーを用いてアフリカゾウの移動について研究をしているジョージア大学の院生と意気投合し、多くのことについて語り合った。学会が終了した後も連絡を取り合っている。また、1年ほど前までスリランカで野生アジアゾウの音声の研究をしていたコーネル大学の院生とも話し、ゾウの音声の特徴や音声機材の特性について詳しく聞くことができた。これらの情報は、申請者が今後野生・飼育下のアジアゾウの音声研究を進めていくうえでも役に立つであろう。

今回の国際学会では、多くの研究者から自身の研究について意見をもらったり、他の研究者の研究内容について議論したりすることにより、有意義な時間を過ごすことができた。しかし、ネイティブスピーカーと深く議論を交わすには英語力をこれまで以上に磨かなければならぬことを痛感した。申請者は国際学会に初めて参加し発表したが、これまでにないほどの大きな刺激を得られた。国際学会には若いうちから参加をした方が良いことを身を持って感じた。

資金を得ることが困難である学生に対し、助成をくださった貴財団に心より感謝いたします。